

【日 時】 10月12日（土）10：00～12：00
【場 所】 大阪府立西成高等学校 多目的室 A
【出席者】 （会長）西田芳正委員 緋田隆平委員 榎井縁委員
田中俊英委員 堂上勝己委員 東野佳織委員

【内 容】

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 議事
 - (1) 令和6年度の取組状況について
 - (2) アセスメント LAB について
 - (3) その他
4. 閉会

<2. 校長挨拶>

公立高等学校の相次ぐ定員割れを受け、令和7年度以降改革が進む予定であるが、本校はすでに今年度からステップスクールとしての新しい方法に取り組んでいる。今後もオープンスクールが続くので、学校紹介を行い、生徒たちにはミスマッチのないように入学してもらいたい。また、本校では地域連携に取り組んでいる。11月には本校を会場に、0-ROUNDを実施する予定である。

危機感を抱いていることは、学校としての仕組みづくりが進んだことにより、以前よりも教員の熱量が下がっていること。「出来上がったもの」として学校の仕組みが存在しているために、新しく入った教員たちが「なぜこうするのか、なぜ大切なのか」について考えることが減っている。仕組化は継続するために重要だが、根幹の部分をどう伝えていくかを含めて、ご意見をいただければと思う。

<3. 議事>

(1) 今年度の取り組み状況について

各学年の取り組み状況

<1年生>

- ・年度当初170名から、現在は在籍のみを除き160名。
- ・学年目標「人、モノ、時間を大切にしよう」に関連した月間目標（「あいさつ・返事をしよう」「時間に余裕をもって行動しよう」等）を立てて取り組んでいる。
月間目標は1年生のフロアに掲示し、生徒が見て意識できるように努めている。
- ・5月には「仲間づくり」を目標に、校内でレクリエーション・バーベキューを実施し盛況。
10月には校外学習を実施予定。「自分の得意を活かそう」「友達の良いところを見つけよう」を目標とし、有志による発表を行う。
- ・生徒会活動に1年生から5名が立候補した。
来年度は人数を増やしながら、活躍できる人材を育てていきたい。
- ・生徒指導事案について、SNSの取り扱いや、相手に自分の気持ちを伝えることへの指導が必要。
- ・N-TIMEは4期中2期が終了しており、現在3期。残すところ2テーマとなっている。

- ・配慮が必要な生徒や悩みごとを抱えた生徒を中心に、SCによる面談を多く実施している。
SCに本人の課題や考えを整理していただき、生徒が学校に登校できる環境づくりをしている。

<2年生>

- ・年度当初192名から、現在183名在籍。転退学者は今後も出てくる見込みである。
転退学に至る主な原因は登校できないこと。実際に、朝のSHRの時点で各クラス5名程度いないことが常であり、30名中多くて25名、少なくても17名程度しかいないことがある。担任に家庭訪問等を進めてもらっているが、なかなか改善しないのが現状である。
- ・現在、進路活動、宿泊研修、テーマ別人権という3つの大きなテーマが同時に展開している。
- ・宿泊研修には、160名程度参加予定。不参加の理由は金銭面、飛行機が苦手、民泊が不安など。
現在はホテルの班や見学コース決めをしている。準備に伴い人間関係の悩みも出てきているが、担任が話を聞きながら参加を促している。
- ・テーマ別人権では、卒業生に「子どもの権利」を中心とした講演をしていただいた。
卒業生が大勢の前で話す姿は、生徒たちにとって印象的であった様子。
10月には部落問題について、地域連携コーディネーターの寺島さんに講演をしていただいた。
- ・6月のインターンシップには163名が参加した。3日間全て参加できたのは120名程度で、体調不良等で部分的に参加した生徒が約20名。校内実習に参加した生徒についても、20名のうち、3日間全て参加したのは約10名であった。
現在の進路活動では、求人票の見方を学び、実際の求人票をみて選択する練習をしている。
- ・2年生全体を通して、疲れは出てきているが、まずは宿泊研修に向けて頑張っていきたい。
宿泊研修を通じてできるだけ多くの生徒が進級できるよう、細やかなフォローをし続けたい。

<3年生>

- ・学年目標は引き続き、「やらなあかん。やるしかないんやで」。
- ・6月のスポーツフェスタでは、約20名が応援団に参加した。1、2年生のときにはエントリーが少なかったが、最高学年になったことをきっかけに、主体的に取り組むことができていた。また、この学年は太鼓の練習をしていたので、演舞にうまく活かすことができていた。
- ・進路面談では、担任が生徒とのきめ細やかなやり取りを通して、生徒を就職活動につなげた。
- ・進路実現のためにも、生徒が遅刻欠席等も含めて「学校生活の基盤をしっかりとやる」ように学年から声掛け・アナウンスしている。
- ・遅刻は3000件から1500件に減り、欠席も1/3程度に減っている。表面的には改善しているが、面接への取り組み姿勢、心構え、面接練習で注意されたときの反応等、実際の部分の課題は9月の就職試験前に浮き彫りになった形。
- ・就職が決まり、進路実現に取り組んでいく生徒もいるが、決まれば終わりではない。
4月の就職・進学に向けて最後の取り組みの流れをつくることができるよう、検討中。
- ・社会に出る準備、心構えが課題。本人は頑張っているつもりが基準に届いていない。
行事を通してチャレンジングな取組をしているが、7月から急に進路へは切り替えられない。
切り替えられるよう、事前の準備段階に仕掛けが必要だったと反省。
残りの期間、卒業後の進路実現に向けて、学年全体でサポートをしていきたい。

(1) の質疑応答

委員「先ほどの校長先生からの話で、西成高校は新しい改革を行ってきたが、その動機を知らない教員がいるという内容があった。2年生は朝の SHR で5人ほどは必ず休みがいるということであった。西成高校では、3、4年前に生徒のアルバイト事業などを鑑みて、1時間目を無くすという画期的な取り組みを始めているはずである。この1時間目を無くした経緯や意義を教員が理解できているだろうか。また生徒もそのありがたみを感じているのだろうか。」

第2学年主任「現在の2年生は、入学当初から1時間目がなかった。そのため、生徒たちは中学校よりも始業時間が遅いことを喜んでいて。しかし2年生になり、この9時35分始業に慣れてしまっている印象がある。」

校長「先ほど申し上げた意図としては、制度上の問題よりも指導上の問題において、もう一度西成高校の立ち位置を確認したいということだった。特に進路について、時代の流れとともに求人数などは大幅に増回している。「学校斡旋就職」という言葉自体も正確に認識している教員が少ないのではないかとも思う。そのような過去の話なども伝えていくことで、よりよい生徒指導につながると感じている。」

委員「改革の意図や動機を知らない人が出てくるのは、企業ではよくあることだ。西成高校は、校長先生をはじめ、長く在籍している教員も多い。みんな共有できているだろうという落とし穴がある。異動などで、数年単位で人は変わっていき、2～3年で取り組みの意図は忘れられてしまう。制度の話も価値の話も、改革の意図を教員に伝え、担任が生徒に伝えるということが重要である。」

委員「苦労して改革した中学校が10年後同じような問題に直面してしまうということはよくある。継承が大切だが、日本の学校の春休みは短く、また異動もあり、そのような時間が取れないという難しさがある。特に西成高校では、新入生の情報収集のために時間が取られると推察される。継承のために何かしかけはあるのだろうか。」

校長「年度当初の研修を工夫している。10日間ほど設けており、今年の転任者からの評判もよかった。ただし、研修を作っている側も慣れてきてしまい、削除したり、話す必要がないと判断したりする内容もある。内容の再検討が必要だと考えている。今のところ、大きな崩れなく継承できているが、どこまで伝えられているかの危機感を感じている。これは地域や中学校との連携のためにも大切なことである。継承するためには、まず今までの取り組みの良さはどこなのかを再検討する必要もあると考えている。」

委員「定員割れしている府立高校が多いなかで、西成高校が定員割れしていないことは大変価値のあることだと思う。新たに台頭してきている通信制高校は、卒業要件がゆるく、その条件を見て、生徒が流れている印象がある。実践校、モデル校のステップスクールとしてどれほど自覚しているのか、校内・校外においてどれほど共有・発信されているのかを知りたい。」

校長「ステップスクール教育委員会から指示されて始めた取り組みではなく、今まで我々がやってきた

ことが認められた結果である。生徒と向き合い、つくりあげた取組を教育委員会に伝えたことで実践校としてやろうという流れになった。その点については自信を持っている。

一方で、生徒は減ってきている。そのなかで教員が生徒に言うことをきかせようとしすぎている印象がある。多様な生徒が多く、生徒は勉強が嫌いという前提でできた学校であることを再認識し、その意識のもとで取り組みを行っていくことが大切である。まだステップスクールとしてできることもある。

対外的な面でいえば、西成高校では加配を多くもらっているからさまざまな取り組みを実践できていると思っている他校の校長も多い。“西成だけ”とねたまれることもある。しかし実際にやろうという人は少ない。また西成のスタイルをぜひ実践してほしいと思うが、例えば定期テストをなくせばそれで上手くいくというわけではない。各学校にあった形で検討し、取り組んでほしいがそのようにする学校はあまりない。」

校長「宿泊研修の実施について意見をいただきたい。」

委員「卒業して就職する生徒が多く、また専門学校に進学しても必ずしも修学旅行があるとは限らない。多くの生徒にとって最後になる学校生活で、小学校中学校であった宿泊研修がないのは寂しく感じる。」

委員「選択制にするのがよいのではないか。宿泊研修と同様の経験ができるような別プログラムを用意したい。」

校長「費用面を懸念している。お金が無いから宿泊研修に行くことができなかったという事実は、単に思い出に差がつくだけでなく、行きたかったのに行けなかったという苦い思い出になってしまう。」

委員「通信制高校に対抗する手段として学校行事としても検討する余地がある。学校は一度何かをはじめるとやめづらいという側面をもっている。また学校行事は、指導性を担保していることもある。それらを総合的に考える必要がある。」

委員「今は少人数制で行動している企業も多い。大勢で共有する、仕事をするという場面は実際に社会に出てからも少ない。集団で行動することが苦手な生徒もいる。集団行動ができないからといって、社会に出て困るということはない。」

委員「会社負担の慰安旅行に社員の半分しか参加していなかった。普段話をしない人たち同士の交流の場になればと思ったが、実施自体を検討したいと思っている。」

校長「本当に別プログラムが宿泊研修の代わりになるのかも十分に検討しなければならない。」

委員「別プログラムは野外の音楽フェスに参加してみるという内容でもよいのではないか。また金額別のコースを設定するのもよいと考える。差別や格差の議論にならないよう、工夫する必要はある。」

校長「難しい側面もあるが、オプション制について検討していきたい。」

(2) アセスメント LAB について

校長

- ・2024～2026 年の 3 年間、ステップスクール 1 期生が卒業するまでの間にステップスクールの仕組みができるように取り組んでいきたい。
- ・アセスメント LAB の「アセスメント」とは成績評価、生徒状況の調査など様々な意味が入っている。
- ・構成メンバーは校長・教頭・主席・教務学習課・10 年研対象教諭などで活動
- ・入学してくる生徒の状況を中学校へ聞き取りに行ったり、保護者に聞き取った内容を指導に活用していく。

〈現状と課題〉

①定期考査をなくしたことによる成績配慮生への「配慮」とは

- ・他校では定員割れによって障害のある生徒が入学するが、内規が整っていないため留年・中退・転学してしまうなどの問題がある。→西成高校のニーズが高まっている
- ・ニーズが高まっているが、どのような配慮がされているのか
→「おまけ」をしていないか。「落ち着きがない」で評価を下げていないか

②西成高校の生徒にとっての個別最適な学びとは

- ・配慮が必要な生徒は全体指導でついていけるのかを考える。
- ・やさしい日本語で授業をすることを心掛ける。

③嘲り、いじりがきっかけとなる生徒指導の問題が多発

- ・大阪人のツッコミといじりが生徒の間でも横行しているが、一步間違えればいじめに発展していく可能性がある。
- ・嘲り、いじりの笑いのリテラシー、活用法などについて研究していきたい

④外国ルーツの生徒だけでなく、不登校経験や知的障がいがある生徒の日本語読み書き能力への課題意識

- ・日本語能力の測定の方法について
- ・外国ルーツに限らず、生徒全体の日本語能力も考えていく

〈視察について〉

・立川チャレンジスクール

- ・1～3 部の定時制
- ・不登校のための学校
- ・校外活動で単位認定
→資格、検定、アルバイトなど多様に実施

・世田谷泉高校

- ・学校には登校するが教室にはいかず「居場所」へ行き、高卒認定の勉強をしていた
→高卒認定が取れば退学し、次の進路を目指す

・次回は福岡の橘高校へ視察予定

・不登校は 2 種類ある

→「勉強嫌いで学校嫌い」と「勉強好きで学校嫌い」

西成高校のミッションは「勉強嫌いで学校嫌い」を「勉強嫌いだけど学校好き」に変える

- ・春に実施したベネッセのアンケート、「自分の強み」で4割の生徒が「自分の考えを伝えること」と回答
→授業の中で参加した（16.3%）
- ・「自分の考えを伝えること」と回答した生徒のなかで「目標や計画を実行する経験」に変えていきたいという生徒が5%から30%まで増加

（2）の質疑応答

Q1：委員「アセスメント LAB の現状をより一般化した4つの研究内容を、さらに一般化して絞ることができるのではないか。参考として、それぞれをさらに抽象化すると1→評価、2→学びまたは個性、3→マイノリティへの対応、4→言葉、と簡素化できる。」

Q2：委員「外国籍の生徒は全体の何パーセントほどいるのか。」

教員「各学年で3パーセントほど。全員で15人もいない。」

校長「保護者の方が外国籍という生徒を含めると学校全体で1割ほど。」

Q2：委員「外国籍の生徒が特別な人という感じになっているのか。」

委員「会社でも外国籍の方の割合が上がってきており、多様性を認め合わざるをえない状況になっている。全員、日本語を使って働いている。」

委員「母国語と第2外国語（日本語）をどのように使い分けているのか。」

委員「同じ母国語の人同士では母国語で話すこともあるが、仕事においては日本語でスラスラと話している。」

校長「その外国籍の方はもともと日本に在住していた人なのか。」

委員「日本人と同じ条件で働けるという情報が SNS などでは流れているのか、他の企業より外国籍の人の割合が高い。西成区全体でも外国籍の方が非常に増えている。」

Q3：委員「アセスメント LAB の目的はどこにあるのか。」

校長「課題の洗い出しにある。今まで生徒指導や進路指導に力を入れてやってきたが、学びについて後回しになり議論されていなかった。授業は成立するが授業を受けずに教室の外にいる生徒がたくさんいた。時代が変わり教室の中に全員が入るようになると、勉強が難しく安定しないという別の問題が発生し、サポーターの必要性や、易しい言葉で授業をする必要性が出てきた。エンパワメントスクールになって生徒数が少なくなり、易しい授業をしようと学びの問題にたどり着き、ステップスクールになりようやく学びについて議論できるようになった。

た。教育課程が安定してきて、生徒の進路先に大学進学は考えていないと断言できるようになったが、具体的にどのような配慮をしているのか、どのように生徒の力を測るのかを検証しなおし、今までの工夫を伝承していく必要がある。最終的に、ステップスクールとして生徒がもう少し勉強に向いてくれる仕組みを作りたい。」

委員「外部の人からすると、「アセスメント LAB」では、学びを議論できる段階まで来たことがわかりにくいので、タイトルを学びに関連する言葉に変えた方がわかりやすいのではないか。」

校長「安全で安心でみんなが通いやすい学校であること、少しでも学校を好きになって学校に来てもらうことが必要。厳しいことを言われるけど就職をきちんと面倒見てくれる学校というのが本校の最大の取柄であったが、次は学習面で、社会に対して疑問や問い持つことを身に着けてほしい。そのためには社会に対して関心を持てるような内容を授業で取り上げていくことが必要。アセスメント LAB のタイトルについてはもう少し考慮していく。」

Q4：委員「小中学校で外国人の割合が全校生徒の3～4割にまで急増している。その中で、お金に余裕がある生徒と、経済的にしんどい生徒や学習についていけない生徒、障害を持った生徒の格差が激しくなっている。高校進学を考えるとそのような生徒たちを分けずに学習させなければならない。枠校は競争が激しく、しんどい生徒は枠校の入学選抜に通れる段階まで学習がたどり着けない。枠校は勉強ができる外国籍の生徒の受け入れ皿となっており、同じような格差が生まれている。グレーな書き方でもいいから、そのまま学びに参加できると認められていることを強調してもいいのではないか。」

校長「本校は日本語支援の専門的な体制がなく、外国籍の生徒を取り出して授業をするのは難しい。クラスの中に外国籍の生徒がいて、クラスの他の生徒も受け入れることはできている。」

委員「枠校も伝統的でよいが、西成高校スタイルの受け入れをもっと増やしてほしい。」

校長「エンパワメントスクールでそういう取り組みができたらいいなと思っている。」

委員「小学校では西アジアや家族滞在の子供たちが増え、親も経済的に不安な人が増えていくだろう。」

委員「今までは安い労働力を外国人に求めていたが、今は裕福な外国人もいて、二極化されてきている。」

校長「高校の方がガラパゴス化している。一定層の生徒が入り続けているのであまりわからない。その地域に外国籍の方が入ってこれば、小中学校にはそのまま入学していくと思うので、高校の方があまり現状を見ることができない。地域の小中学校で外国籍の生徒が学んでいるところを見せてもらおうなどして、もっと地域と一緒に学んでいきたい。」

委員「日本語が難しい中学生も多く、中学校としては日本語指導をしていきたいが難しい。進路の選択の幅が広がり、毎週保護者を呼んでいる。」

校長「西成高校は入試さえ通ればどんな生徒でも受け入れて卒業を目指していくスタイル。」

委員「JASSO の奨学金は外国人の生徒も受け入れられるのか。奨学金の制度や、進学に必要な入学金や授業料などについて、保護者の方が理解できず、高校卒業後すぐに高額な借金を背負うことになってしまった外国籍の方がいた。」

委員「家族滞在の生徒は日本に来た時期によって奨学金を受けられるか、そのまま就職できるかも変わる。日本に来た時期が遅いと、日本語検定何級かなどでも在留資格が変わる。家族滞在のままだと雇えないと思っている会社も多い。」

<3. その他>

進路状況について ～49 期生～（令和 6 年 9 月 30 日時点）資料 4

・資料の説明、読み上げの後、質疑応答

委員「求人数について教えてほしい。」

進路保障室長「届いている求人数をすべて数えると 1500 程度。一次斡旋ではそのなかから 647 件（指定校求人・公開求人・西成高校関連企業）を生徒が閲覧できるようにしている。」

委員「給料も上がっていると他校で聞いたが実際はどうか。」

進路保障室長「最低賃金の改定で求人票の差し替えをする企業がいくつかあった。手取りが 13～14 万円程度だったのが、ここ 5 年ぐらいで 15～16 万円程度になっている。」

委員「業種はどう決めているのか。」

進路保障室長「希望職種に対して担任と相談して決める。」

以上